

韓国の小学校における英語の e 教科書に関する調査

代表研究者 カレイラ松崎順子 東京経済大学 現代法学部 教授

1 はじめに

日本では 2011 年度に外国語活動が小学 5・6 年生に必修化（週 1 回）され、さらに、2020 年度には小学 5 年生からの英語の教科化（2018 年度から部分的実施）が検討されている。しかし、小学校の学級担任の多くは英語や英語教育に精通していないため、教員研修や学級担任をサポートする教材開発が早急に必要である。それらの問題を解決するための 1 つの方策として、Information and Communication Technology (ICT) の導入が考えられる。また、日本では文部科学省が 2011 年に「教育の情報化ビジョン」を発表し、その中で 2020 年度までにデジタル教科書を小中学校へ導入するという目標を掲げている。

一方、韓国では 1997 年に小学校に英語教育を導入し、現在、小学 3 年生から週 2 回、小学 5 年生からは週 3 回の英語の授業が行われている。さらに、韓国はデジタル教科書などの ICT の教育分野への導入は世界一進んでいるといわれており、2018 年度には小中学校へのデジタル教科書の導入を検討している。英語においてはその準備段階として、検定教科書のデジタル教材、すなわち e 教科書が KERIS（韓国教育學術情報院）のホームページ上からダウンロードし、使用できるようになっている。ゆえに、本研究では今後日本がどのように英語のデジタル教科書を小学校の英語の授業に導入していくべきかなど日本の小学校の英語教育のあり方に重要な示唆・指針を与えていくために、韓国の小学校の英語の教科書に付随したデジタル教材と日本の小学校の外国語活動のテキストである「Hi, friends!1」のデジタル教材を語彙およびコンテキストの面から比較し、日本は韓国からどのようなことを学べるかを検討することにした。

2 韓国の英語のデジタル教科書に関する研究

隣国の韓国では日本よりも先駆けて小学校に英語を正式な教科として導入しており、主に、小学校教員が英語の授業を担当しているため、彼らをサポートするためのデジタル教材が非常に充実している。近年では 2011 年に韓国の文部科学省にあたる教育科学技術部と国家情報化戦略委員会が「スマート教育推進戦略」の中で、2015 年度に小中学校において全教科にタブレットを使用したデジタル教科書を採用することを発表したため、その前後には英語の e 教科書やデジタル教科書に関する多くの研究が行われた。たとえば、Park (2008) は英語のデジタル教科書に関する調査を小学校の教員と児童に行い、デジタル教科書は様々なレベルや児童の興味に合わせた内容を掲載できるという点で有用な教材であると述べている。一方、Kim (2013) は小学校の教員に対してデジタル教科書に関する調査を行った結果、多くの小学校教員はデジタル教科書を使用することに不安を感じていたことを明らかにしている。このように韓国では e 教科書やデジタル教科書の研究は多く行われてきたが、利点とともに問題点も指摘されてきた。

その他日本においても韓国の英語のデジタル教科書に関する研究がいくつか行われており、たとえば、カレイラ・執行 (2013) は韓国と日本の英語の教科書に付随したデジタル教材の構成と機能を比較し、韓国のデジタル教材のほうがかわいいアニメなどの動画やゲームが多くあるため、児童は楽しみながら多くの英語を聞くことができ、さらに、韓国のデジタル教材は全体が体系立てて作られており、操作の仕方もわかりやすいということを報告している。

ところで、前述した「スマート教育推進戦略」のデジタル教科書に関する計画が大統領の交代による政策の変更により 2013 年に大幅に変更・縮小され、2016 年現在では英語に関してはタブレット型のデジタル教科書は提供されておらず、e 教科書と呼ばれるインターネット上からダウンロードしてパソコンで使用するもののみが提供されている。韓国教育學術情報院によれば、タブレットなどで提供される教科書をデジタル教科書と呼び、それ以外は e 教科書として定義している。

3 語彙およびコンテキストの特定化に関する研究

日本において多くの語彙研究が行われてきたが、特に、英語の導入が検討され始めた 2000 年以降、小学

生の英語教材を対象にした研究が増えてきた。たとえば、石川（2005）は英米児童文学コーパス、小学校教科書コーパス、および小学校作文コーパスの分析を行い、「日本人児童用英語基本語彙表」を提案している。中條・西垣（2010）は「英語ノート」の語彙を調査した結果、児童は「英語ノート」を通して 386 語の語彙に触れることになり、それらのうち中高等学校の教科書に掲載されていない語彙は 98 語であったことを報告している。

一方、コンテキストの特定化に関する研究においては中高生対象の教科書を対象にしたものが多く、たとえば、山森・藤田・武知・秦・伊東（2003）では中学校の英語の教科書のテキストを場面設定、談話構造、言語機能の観点から分析し、場面設定では生徒にとって身近な場面が数多く設定されていること、言語機能の点では「登場人物が自身の主観的な意見や感情を述べたり、相手の主観的な意見や感情を尋ねたりする発話」（p. 163）が多かったが、談話構造に関してはテキストごと、スキットごとに異なり、それらの違いを明示できなかったと報告している。さらに、教育的示唆として「学校生活や日常において生徒が遭遇する可能性のある、英語使用が必要となる場面を想定し、教科書に組み込むことが重要」（p. 163）であることや「教科書のスキットの談話構造がどのようなものであれば適切なのか、談話構造の研究と学習に関する研究の両知見を踏まえて究明していく必要」（p. 163）があること、さらに「文化背景が異なる対話の相手に注意や禁止を促す表現は非常に重要な機能であり、その様な機能を持つ発話を加えていく必要」（p. 163）があることを記している。さらに、伊東・高津・長安・廣地・福嶋（1994）は、中学校の英語の教科書においてコミュニケーションの本質であるコンテキストの特定化がどの程度行われているかを分析し、「どの教科書においても、発信地域と発信場所の確定率が低く、特定化の度合いが低くなっている。特に発信場所については、対話教材においても不明確な場合が比較的多く見かけられ」（伊東他, 1994, p. 60）、発話当事者に関しては、一方が日本人、あるいは日本人同士である場合は教科書間でばらつきがみられるが、英語話者が発話当事者となる場合はどの教科書も比較的高い割合である一方、非英語話者(日本人を含まない)である場合は少なかったと報告している。

4 方法

4-1 分析する教材

本研究で使用した教材は韓国の検定教科書の 1 つであるチョンジエ教育の小学 3 年生対象の教科書に付随したデジタル教材「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」（ハン, 2010）と 2012 年度に日本の文部科学省より配布された小学 5 年生対象の「Hi, friends!1」に付随したデジタル教材である。対象学年が小学 3 年生と小学 5 年生で異なるのは、日本にあわせて韓国の小学 5 年生の教科書のデジタル教材を分析した場合、韓国の小学 5 年生はすでに英語を 2 年間学習しているため、教える内容が日本の小学 5 年生とかなり異なることになり、教材の比較が難しくなる。小学 3 年生と小学 5 年生では発達段階がかなり異なるため、教科書で扱われるトピックが異なることは容易に予想できるが、本研究では児童を対象にした調査ではなく、デジタル教材を比較するため、英語のレベルがかなり異なる同学年の教材を比較するよりもはじめて英語の学習をはじめる学年にあわせたほうがより妥当な結果が得られると考え、韓国の小学 3 年生と日本の小学 5 年生対象のデジタル教材を比較することにした。

さらに、内容分析に関しては韓国で最も使用されている e 教科書から 3 冊、『Elementary School English 3』（チョンジエ教育, 著者ハン他, 2013）、『Elementary School English 3』（チョンジエ教育, 著者イ他, 2013）、および『Elementary School English 3』（チョンジエ教科書, 著者ユン他, 2013）を選択し、3 冊全体の傾向と各 e 教科書の特徴を調べ、最後にそれらの結果とカレイラ・執行・宮城（2016）で分析を行った「Hi, friends!1」の結果と比較した。

4-2 データ処理

最初に「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」と「Hi, friends!1」に付随するデジタル教材のスクリプトを作成した。次に、テキストマイニングソフト Text Mining Studio5.1 を使用して語彙の頻度を調べた。テキストマイニングは「質的な言語データ（テキスト）の中に埋もれている情報を掘り起こし、活用するための方法である。テキストマイニングにおいては、まず得られた言語データを品詞や活用といった形態素レベルや主語と述語の係り受けなどの構文レベルで解析し、その結果を分析や分類して提示するといった作業が行われ」（山西, 2011, p.111）ており、Text Mining Studio5.1 はテキストに付随する属性を活

かした様々な分析ができる。本研究では最初に「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」と「Hi, friends!1」の単語頻度分析を品詞別に行った。さらに、出現頻度が多くなく上位に現れていない重要な単語を見落とす可能性もあるため、補完類似度を用いて「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」と「Hi, friends!1」の特徴語を品詞別に抽出した。

また、内容分析に関しては伊東他（1994）の分析方法をもとに、（1）対話者の国籍、（2）発話場所、および（3）発話の種類について分析を行った。

- 1) 対話者の国籍を韓国人対韓国人、韓国人対韓国人以外、韓国人以外対韓国人以外、韓国人対マスコット、韓国人以外対マスコット、韓国人対不明、韓国人以外対不明、不明対不明、その他に分類した。なお、ハン他の「Show Time」、イ他の「Ready! Action!」、ユン他の「Role-play」では animation の劇になっているので全て「登場人物」として処理した。また、韓国人、韓国人以外、マスコットが対話している場合、マスコット対動物は「その他」とした。
- 2) 対話場所を戸外、家、学校、不明、その他に分類した。なお、ハン他の「Show Time」、イ他の「Ready! Action!」、およびユン他の「Role-play」では animation の劇になっている場面を「その他」として処理した。
- 3) ターンを以下のように分類した。
 - A 場面数、対話数、およびターン数を分類した。
 - B 1 場面における対話数を分類した。
 - C 1 対話内のターン数を分類した。
 - D ターンの種類とその組み合わせを分類した。

なお、ターンの種類とは、ターンを構成する各発話を、McCarthy (1991) の分類をもとにした伊東他 (1994) の分類をもとに「initiation (対話の開始に当たり主に質問の発話)」、「response (返答)」、「follow-up (コメント)」、「adding (追加)」に分類し、それらがどのように組み合わせられターンを構成しているかを分類し、ターンの種類とした。

5 結果

5-1 語彙頻度の分析結果

(1) 名詞の比較

図1は「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の名詞の語彙頻度である。なお、固有名詞・代名詞などは除外した普通名詞と yes, OK, hello, wow などの間投詞も含めた。図1より明らかなように「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」の名詞の方が圧倒的に多いことがわかる。

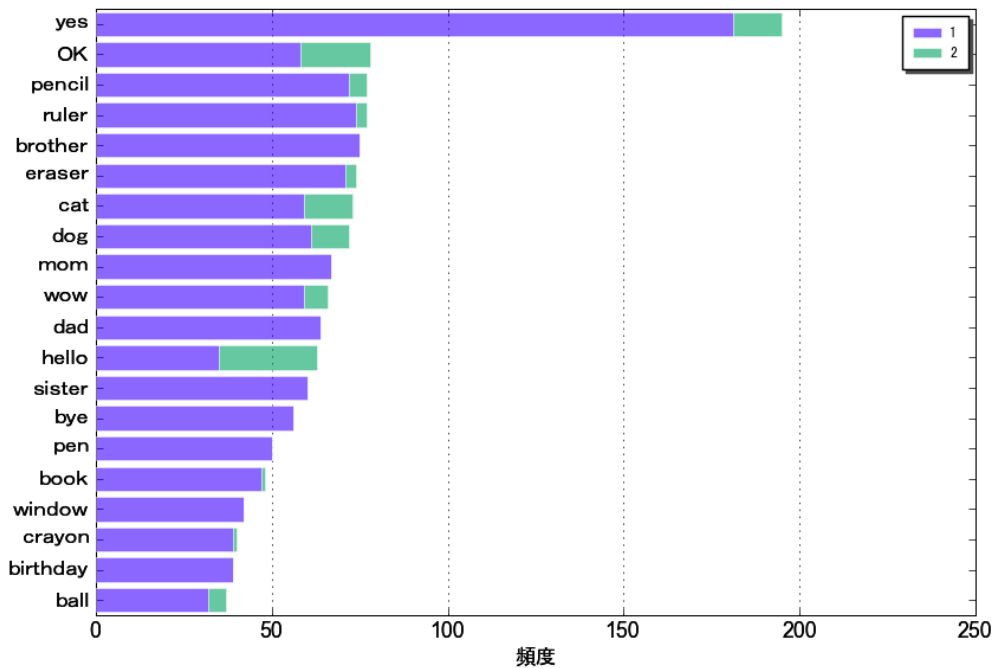


図1 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の名詞の語彙頻度表

図2および図3は「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」と「Hi, friends!1」の名詞のそれぞれの語彙頻度であり、さらに、図4および図5は「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」と「Hi, friends!1」の名詞の特徴語の結果である。図2および図4より「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」ではyesが最も多く、その他、brother, mom, dad, sisterなどの家族の呼称やruler, pencil, eraser, penなど文具用品、dog, catなどの動物、さらに、window, cupなどの日常用品が多く使われているのがわかる。一方、「Hi, friends!1」では図3よりhelloが最も多く、その他、apple, milk, lemon, lunch, bananaなど食べ物とsocial science, Japanese, English, mathの教科が多いことがわかる。特に、図5から明らかのように、「Hi, friends!1」の特徴語は多くがapple, lunch, pizzaなど食べ物やfrying panなど料理に関するものであった。

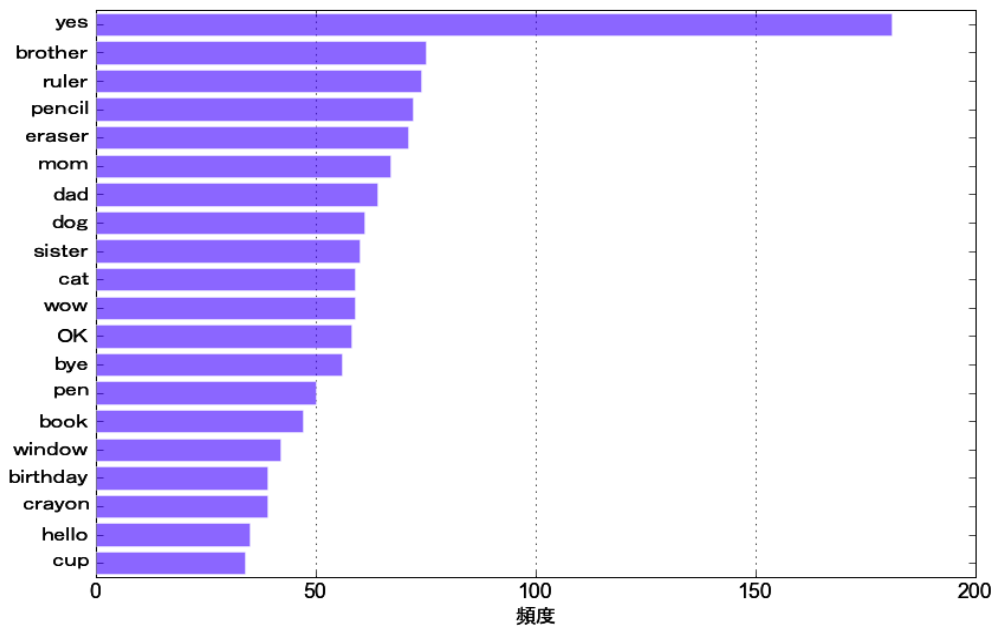


図 2 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」の名詞の語彙頻度表

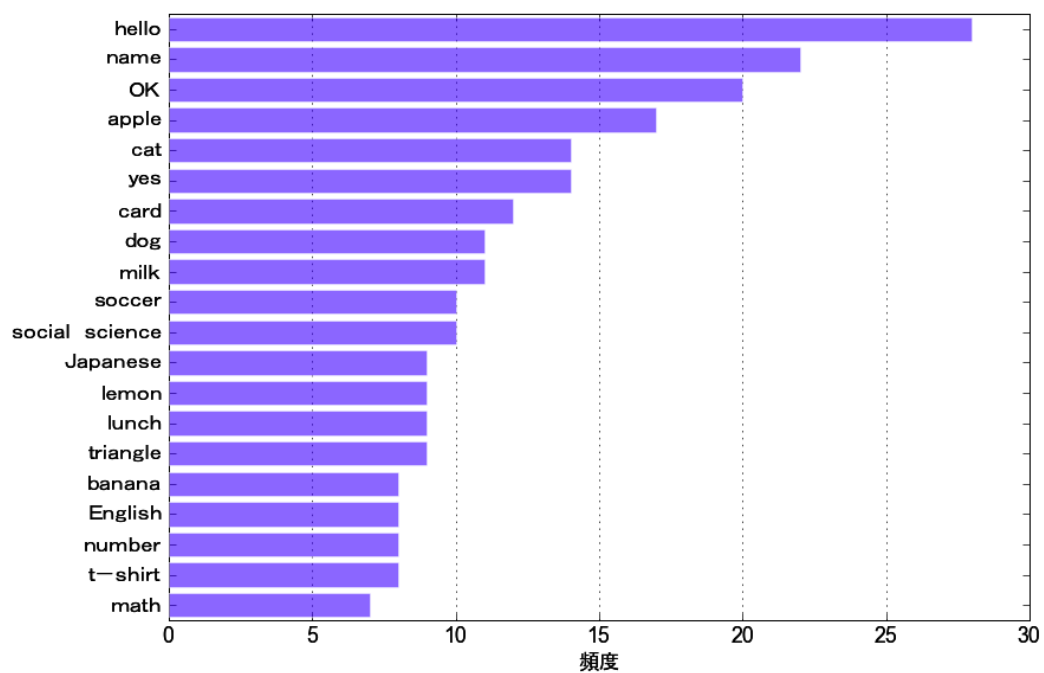


図 3 「Hi, friends!1」の名詞の語彙頻度表

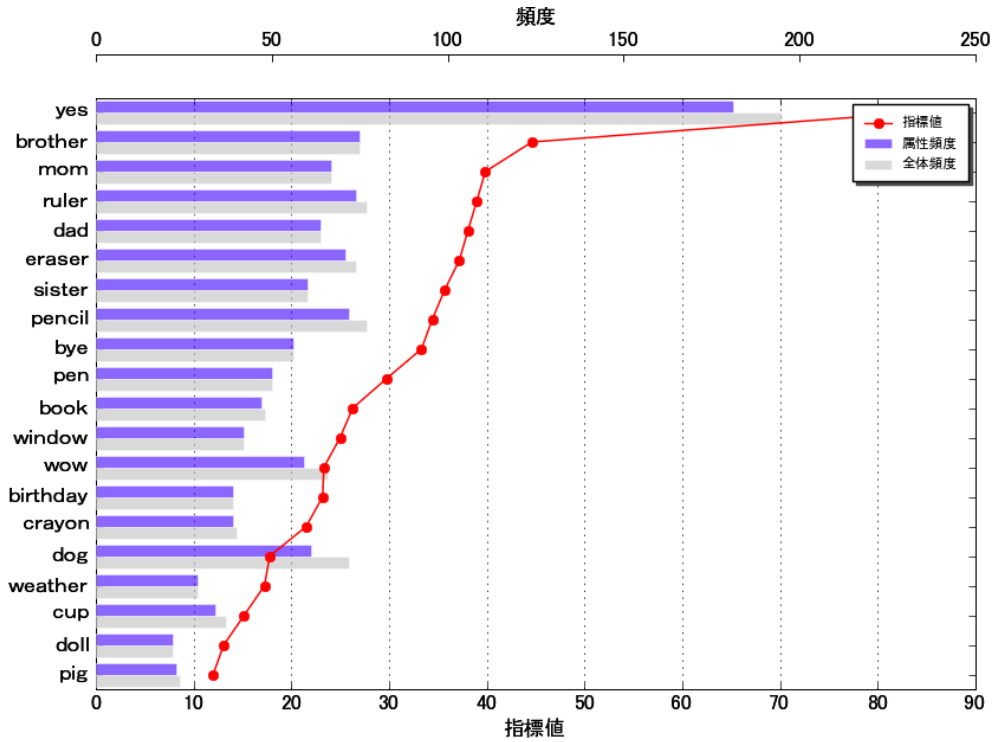


図 4 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」の名詞の特徴語

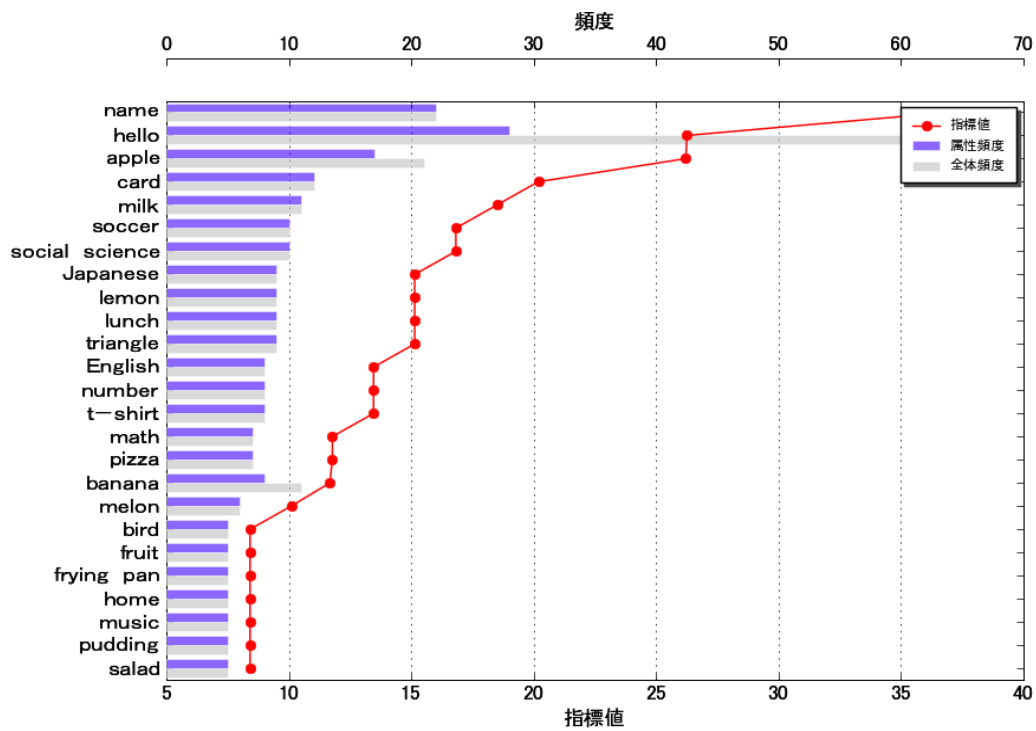


図 5 「Hi, friends!1」の名詞の特徴語

(2) 代名詞の比較

図6は「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の代名詞の語彙頻度である。図6より明らかなように代名詞においても「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」のほうが多く使われているのがわかる。また、両国ともI, youを多く使っていることがわかる。図7および図8はそれぞれ「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の代名詞の語彙頻度であり、図9および図10は「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の代名詞の特徴語である。これらの結果から、「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」ではitが最も多く使われており、「Hi, friends!1」ではyouとIが最も多いことがわかる。

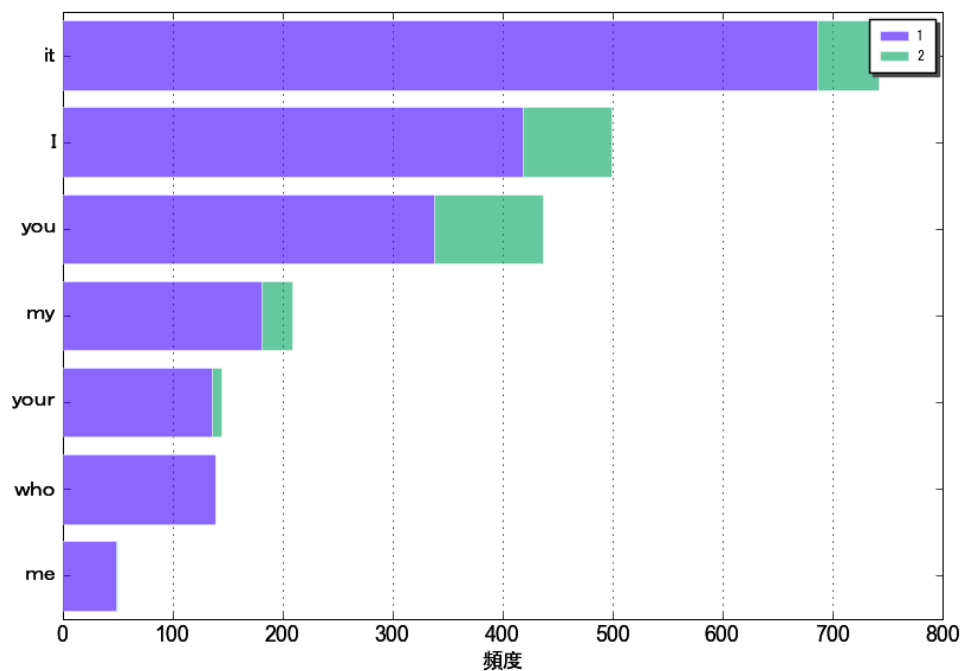


図6 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の代名詞の語彙頻度

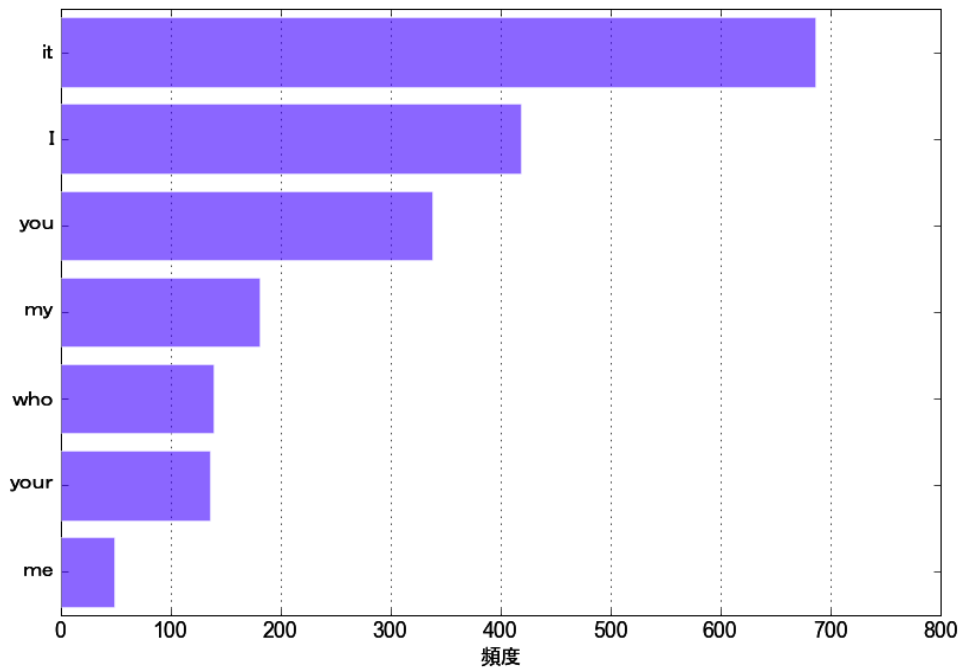


図7 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」の代名詞の語彙頻度表

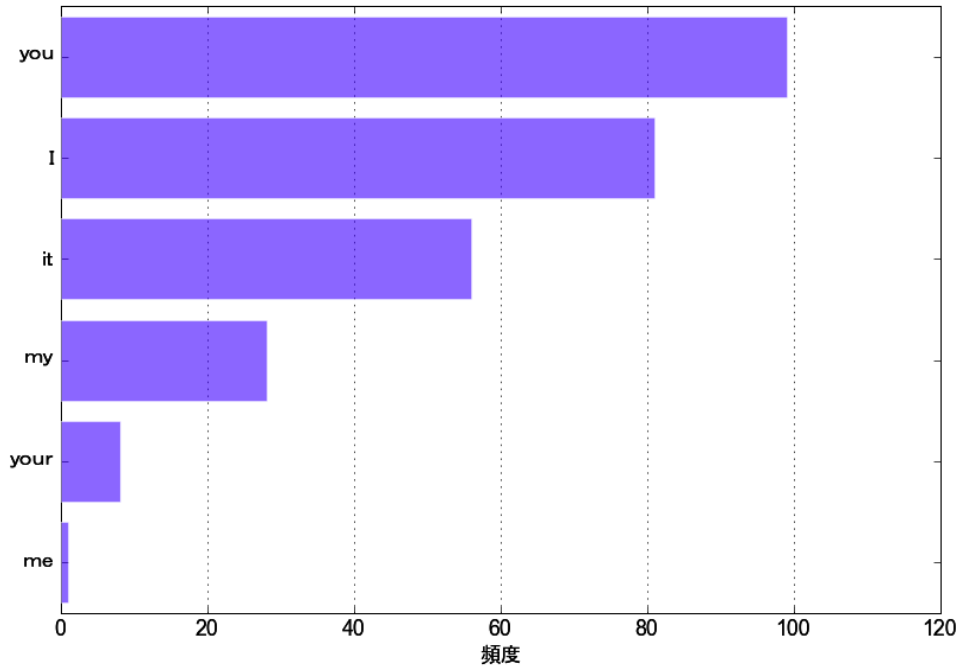


図8 「Hi, friends!1」の代名詞の語彙頻度表

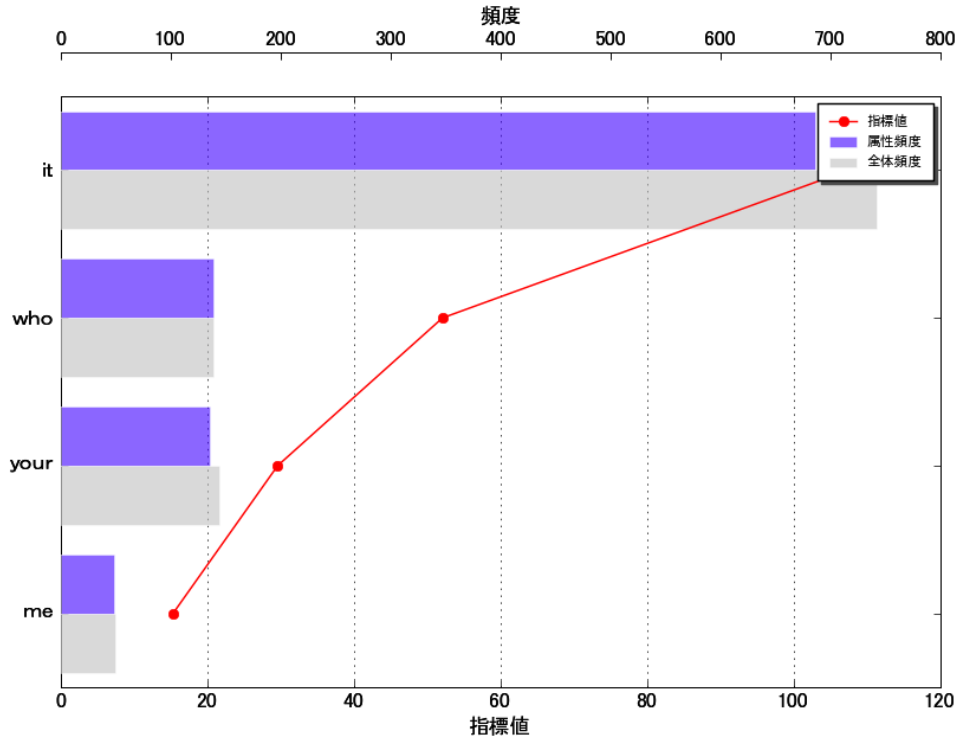


図9 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」の名詞の特徴語

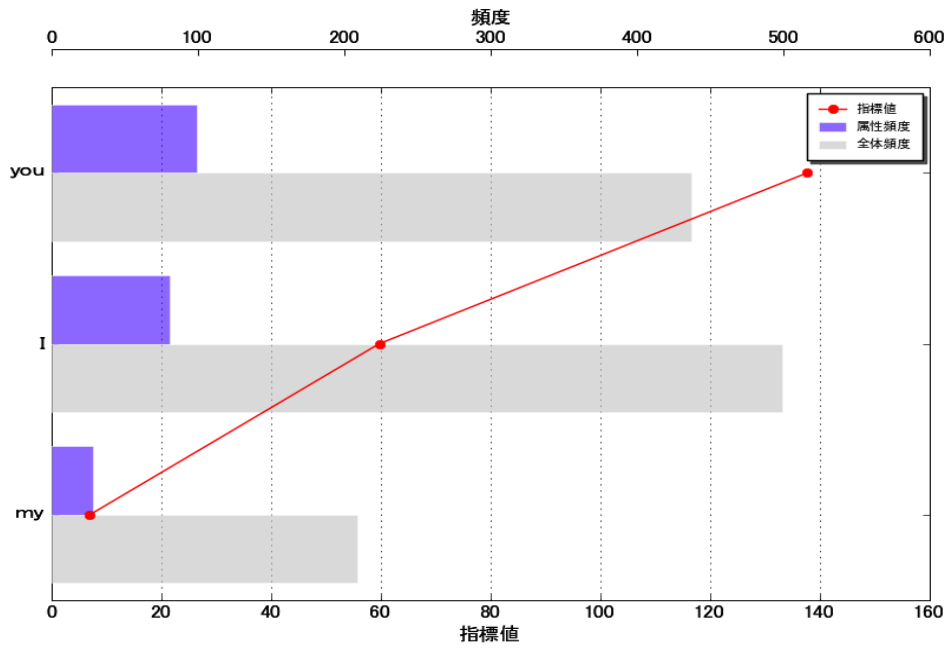


図10 「Hi, friends!1」の代名詞の特徴語

(3) 動詞の比較

図 11 は「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の動詞の語彙頻度で、図 11 から明らかなように、動詞においても「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」のほうが多く使われていることがわかる。図 12 および図 13 はそれぞれ「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の動詞の語彙頻度であり、図 14 および図 15 は「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の動詞の特徴語である。図 12 および図 14 より「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」においては be, have, thank, put, open など比較的一般的によく使われる動詞が多く使われており、図 13 および図 15 より「Hi, friends!1」では like が最も多く使われているのがわかる。

さらに、「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」では do および don がほぼ同じぐらい使われているが（図 12 を参照）、「Hi, friends!1」では do の方が圧倒的に多く、don は少ない（図 13 および図 15 を参照）。

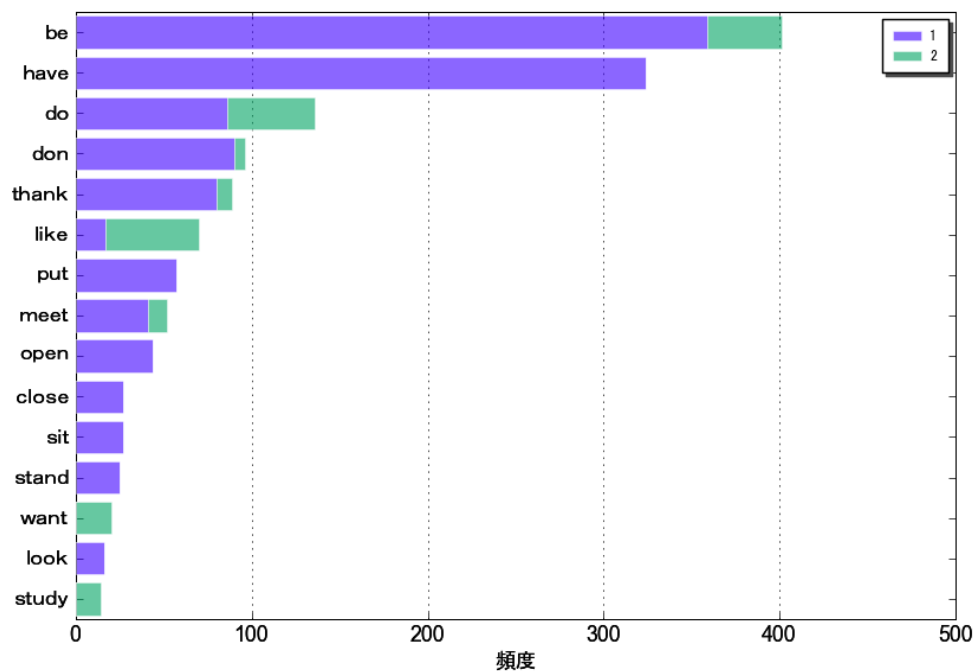


図 11 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の動詞の語彙頻度表

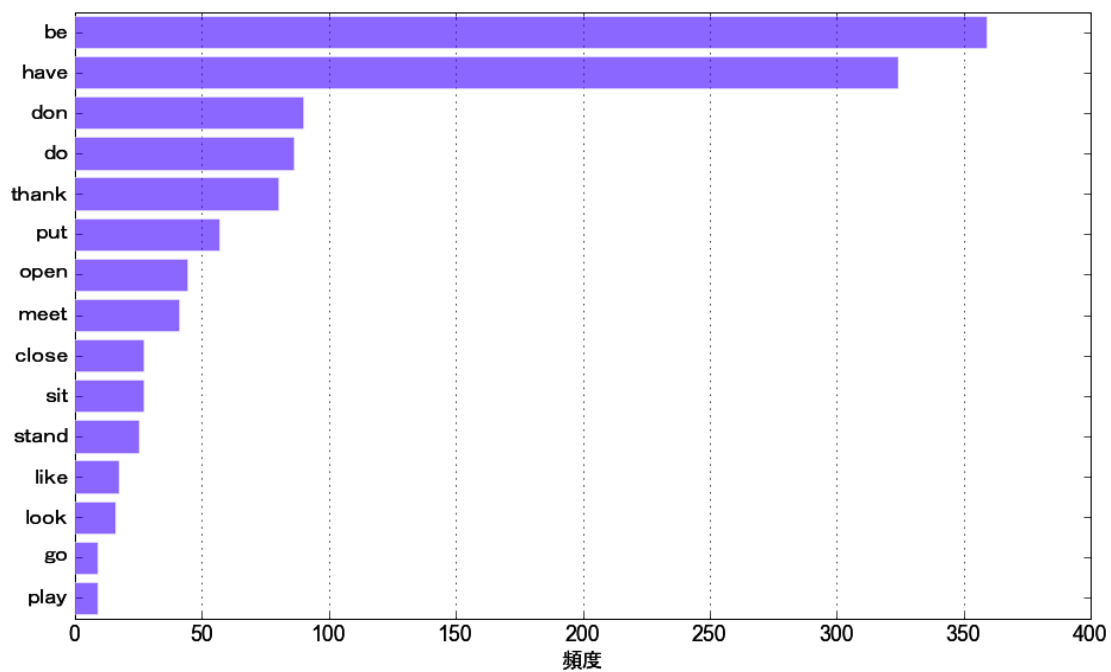


図 12 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」の動詞の語彙頻度表

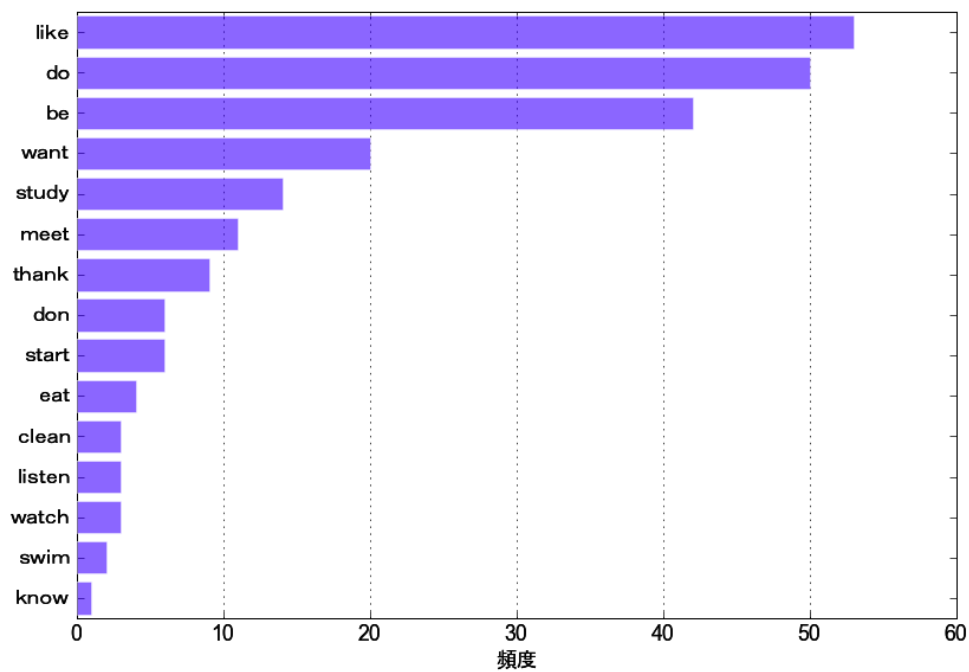


図 13 「Hi, friends!1」の動詞の語彙頻度表

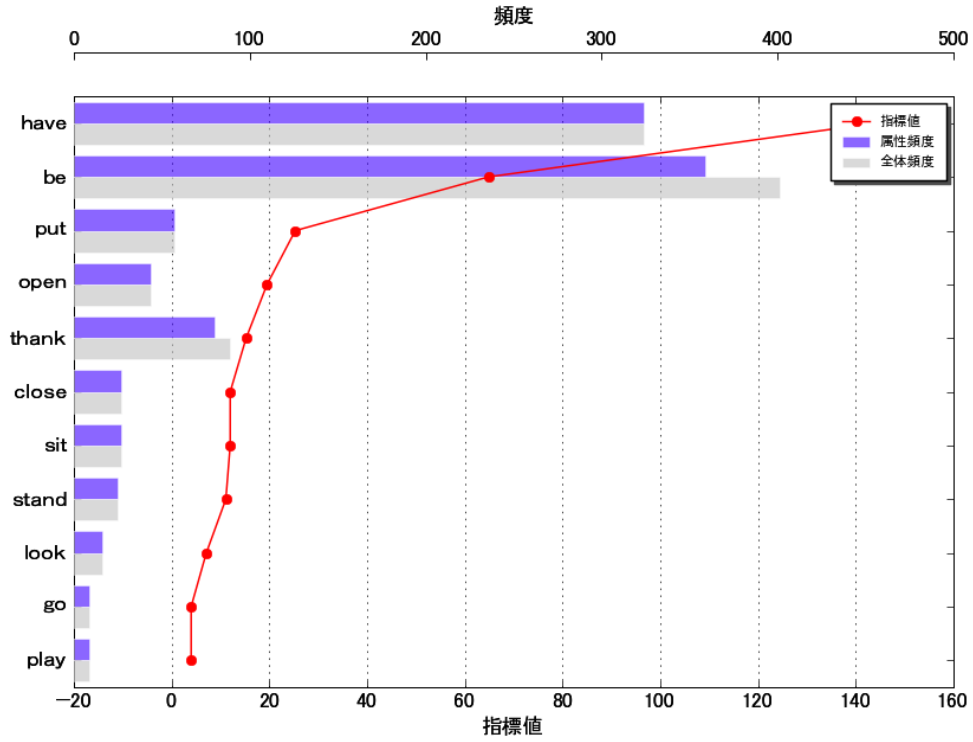


図 14 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」の動詞の特徴語

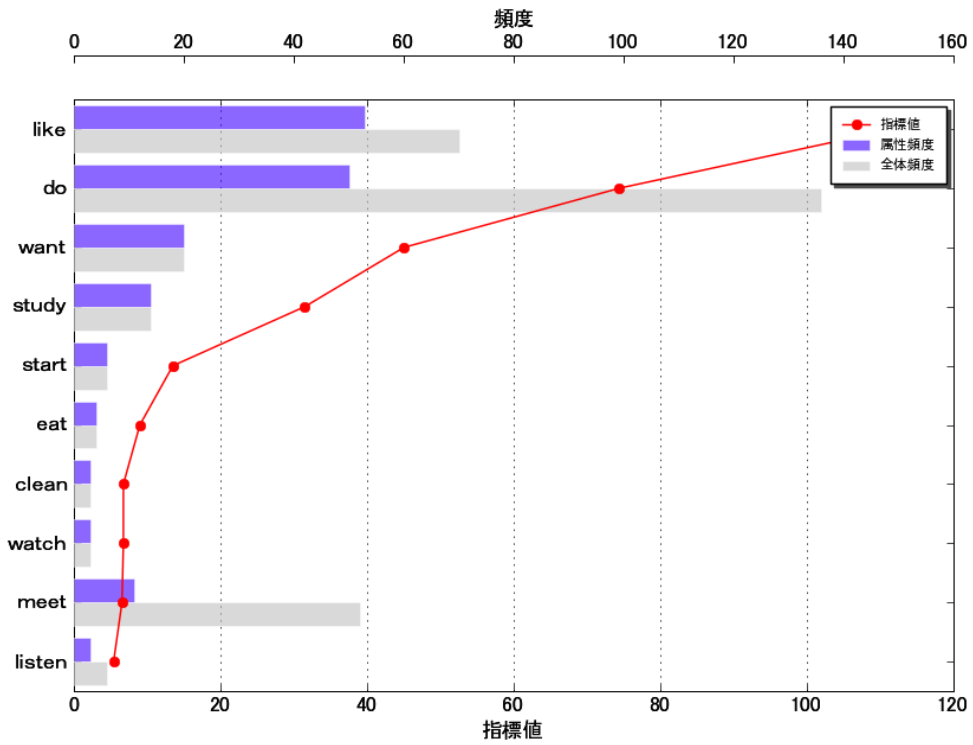


図 15 「Hi, friends!1」の動詞の特徴語

(4) 形容詞の比較

図 16 は「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の形容詞の語彙頻度表である。形容詞においても「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」のほうが多くの形容詞の数が多いことがわかる。

図 17 および図 18 はそれぞれ「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」と「Hi, friends!1」の形容詞の語彙頻度であり、図 19 および図 20 はそれぞれ「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」と「Hi, friends!1」の形容詞の特徴語である。「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」では happy, nice, good など肯定的な語彙が多く使われており、その他、cold, rainy, sunny など天候の形容詞が多いことがわかる。一方、「Hi, friends!1」では many が圧倒的に多く、それについて blue, black, yellow, colorful, purple など色を表す形容詞が多く使われていることがわかる。

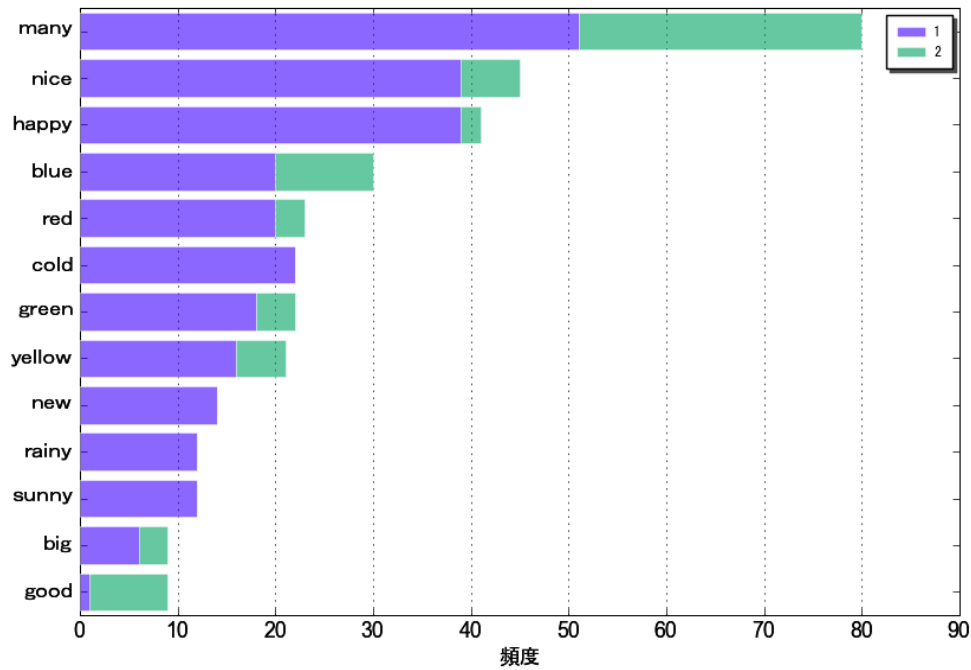


図 16 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」および「Hi, friends!1」の形容詞の語彙頻度表

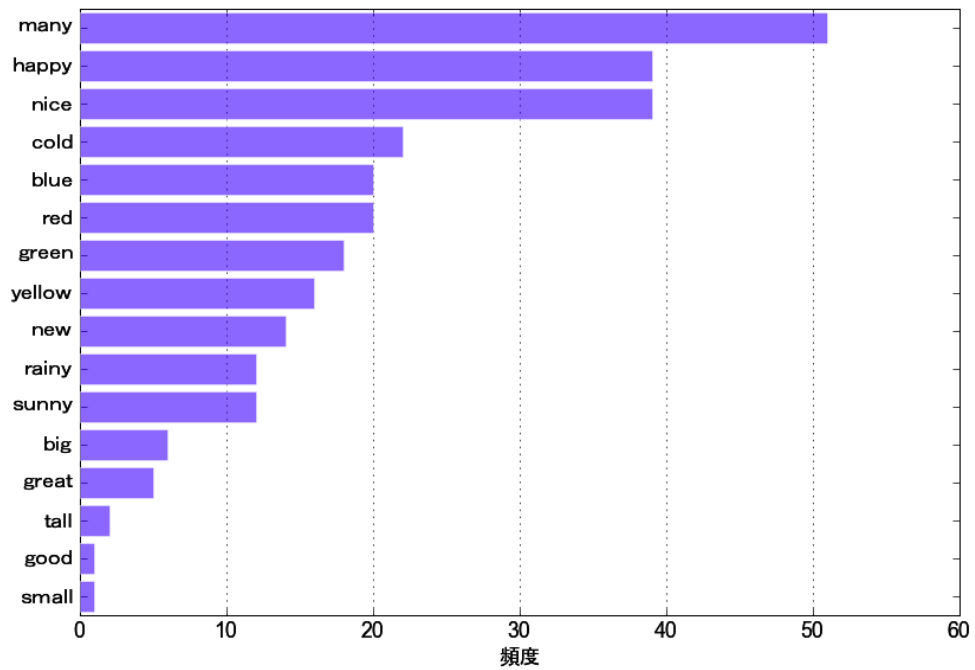


図 17 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」の形容詞の語彙頻度

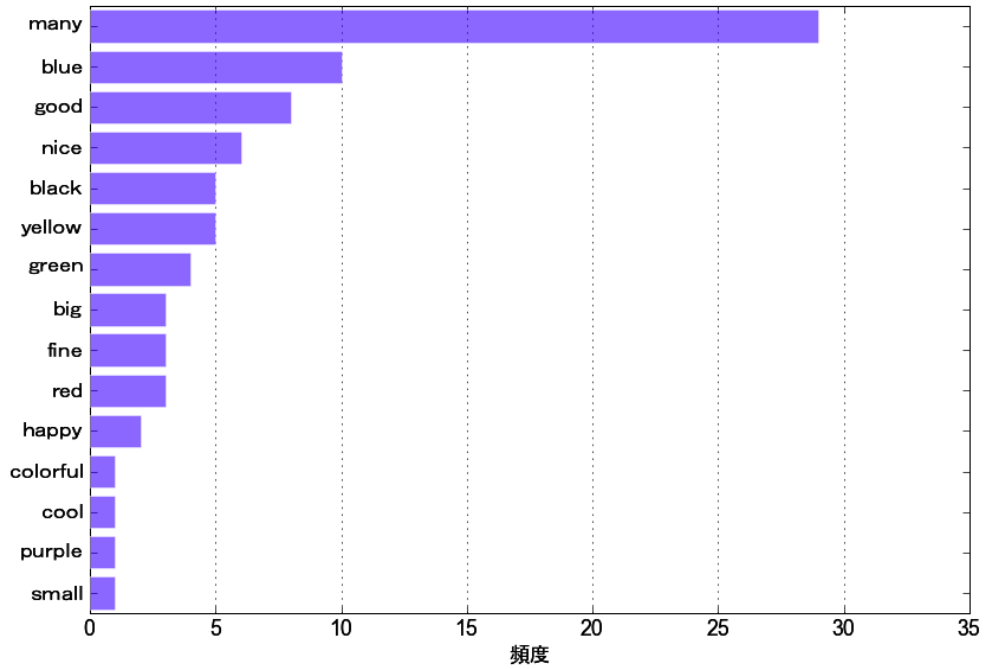


図 18 「「Hi, friends!1」の形容詞の語彙頻度表

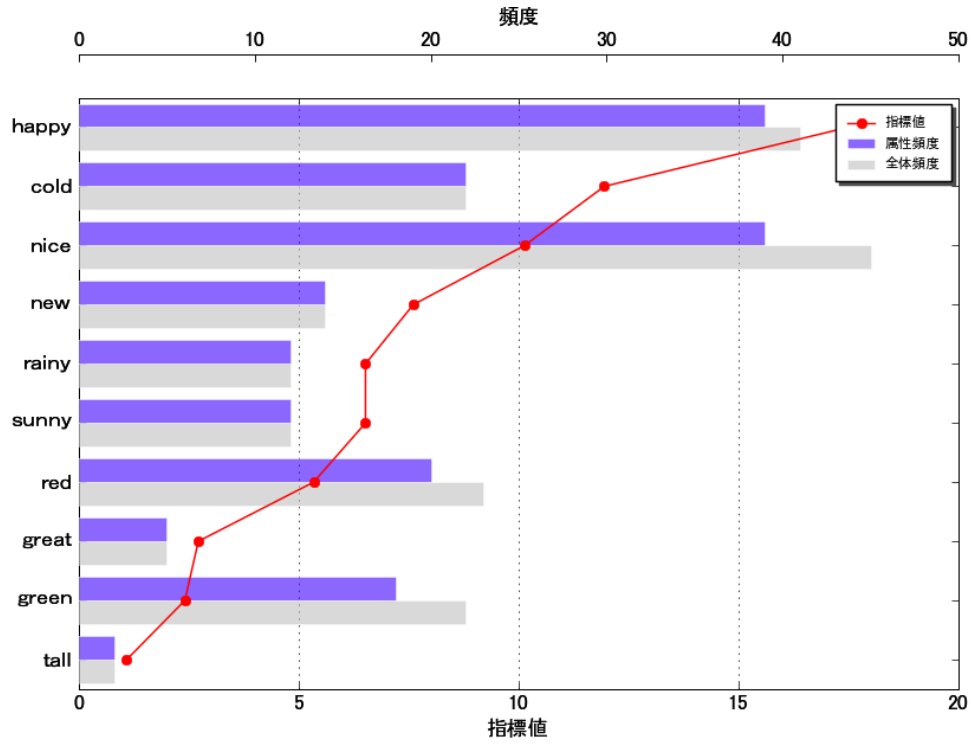


図 19 「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH 3 e-教科書」の形容詞の特徴語

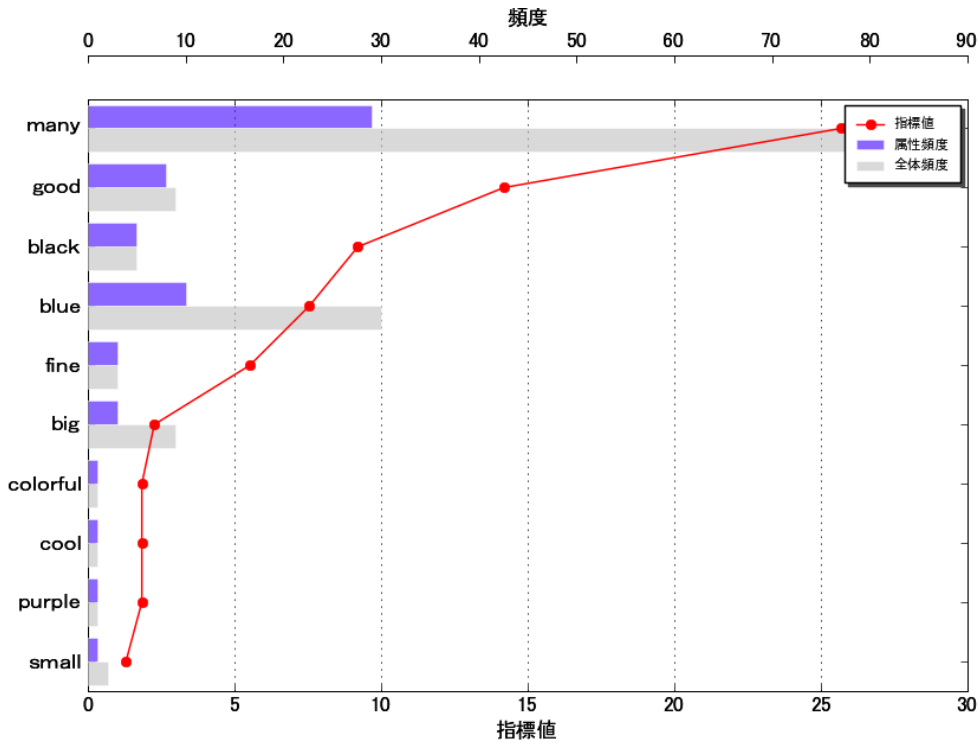


図 20 「Hi, friends! 1」の形容詞の特徴語

5-2 内容分析の結果

(1) 発話当事者の国籍および対話場所

表1が対話者の国籍である。対話者の国籍ですべてのe教科書において不明なものはほとんどなかった。それぞれのe教科書を比較してみると、ハン他では韓国人対韓国人と韓国人対韓国人以外がほぼ同数で、対話の中で一番多い組み合わせであり、登場人物対登場人物、韓国人以外対韓国人以外と続いている。イ他では、韓国人対韓国人以外が一番多く、そのあとに登場人物対登場人物、韓国人対韓国人、韓国人以外対韓国人以外と続いている。ユン他では、韓国人対韓国人以外が圧倒的に多く、登場人物対登場人物、韓国人以外対韓国人以外と続き、韓国人対韓国人がわずかであった。

表1 各e教科書の対話者の国籍

対話者の国籍	ハン他	イ他	ユン他
韓国人対韓国人	86 (32%)	32 (18%)	3 (2%)
韓国人対韓国人以外	81 (30%)	74 (41%)	94 (48%)
韓国人以外対韓国人以外	21 (8%)	15 (8%)	23 (12%)
韓国人対マスコット	6 (2%)	11 (11%)	4 (2%)
韓国人以外対マスコット	11 (4%)	0 (0%)	2 (1%)
登場人物対登場人物	57 (21%)	42 (23%)	53 (23%)
韓国人対不明	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
韓国人以外対不明	2 (1%)	0 (0%)	0 (0%)
マスコット対不明	1 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
不明対不明	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
その他	3 (1%)	5 (3%)	15 (8%)

対話場所は、戸外、家、学校、その他、不明に分類した結果、すべてのe教科書において、不明な対話場所はなかった(表2を参照)。それぞれのe教科書を比較してみると、ハン他では戸外が一番多く、家と学校がその半数でほぼ同数であった。イ他では、戸外が一番多く、家と学校が同数で続いているが、その数はあまり差がなかった。ユン他では、多い順に学校、戸外、家となるが、その差はわずかであった。

表2 各e教科書の対話場所

対話場所	ハン他	イ他	ユン他
家	15 (18%)	17 (26%)	23 (25%)
戸外	28 (33%)	21 (32%)	26 (29%)
学校	15 (18%)	17 (26%)	29 (32%)
不明	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
その他	27 (32%)	11 (17%)	13 (14%)

(2) ターンの分析結果

表3はそれぞれのe教科書に含まれた聞く活動部分およびそれに準ずる活動部分に含まれる場面数、対話数、およびターン数である。場面数においては群を抜いてハン他が多く、イ他、ユン他と続くがこれらはあまり差がない。対話数においては、ユン他が一番多く、ハン他、イ他と続き、それぞれの差も大きい。ターン数においては、ハン他が場面数同様群を抜いて多く、イ他、ユン他と続くが、この2つの差も大きい。

表3 各e教科書の場面数、対話数、およびターン数の結果

	ハン他	イ他	ユン他
場面数	217	159	148
対話数	220	158	264
ターン数	337	264	202

次に1場面における対話数を分類した(表4を参照)。すべてのe教科書において1対話が一番多いが、それぞれのe教科書内の比率では、全てのe教科書において2対話は1対話よりかなり少なく、ハン他ではおよそ2分の1、イ他とユン他ではおよそ3分の1程度、また、全てのe教科書において3対話は1対話のおよそ6分の1程度で、ほぼ同じような割合になっている。

表4 各e教科書の1場面における対話数の分析結果

対話数	ハン他	イ他	ユン他
1対話	129	98	94
2対話	60	32	36
3対話	18	16	14
4対話	7	8	3
5対話	6	4	1
6対話	0	0	2
7対話	0	0	0
8対話	0	0	1

表5は各e教科書の1対話内のターン数の分析結果である。1対話内のターン数はすべてのe教科書において2ターンが一番多く、ハン他とユン他では次に3ターンが多かった一方、イ他では1ターンが多い。また、どのe教科書においても4ターン以上はわずかしかなかった。

表5 各e教科書の1対話内のターン数の分析結果

ターン数	ハン他	イ他	ユン他
1ターン	46	75	43
2ターン	203	158	157
3ターン	79	30	46
4ターン	15	1	1
5ターン	0	0	1

表6はターン内の種類数と組み合わせ数の分析結果である。種類数では、ハン他が一番多く10種類、イ他とユン他が同数の7種類であった。また、ターンの組み合わせでは、ハン他が1番多く、続いて、ユン他、イ他であった。

表6 ターンの種類の分析結果

	ハン他	イ他	ユン他
ターンの種類数	10	7	7
ターン内の組み合わせ数	32	21	24

表7はターンの種類の分析結果である。ターンの種類では全てのe教科書において「initiation」が一番多く40%以上であり、2位も同様に「response」で35%以上である。ハン他やユン他では「follow」「initiation+adding」がそれに続くが、イ他のみ「response+adding」が3位になっている。

表7 ターンの種類の分析結果

ターンの種類	ハン他	イ他	ユン他
I	274	220	200
R	266	169	173
F	51	24	43
Ia	54	22	36
Ra	34	26	29
Fa	0	1	6

Rf	1	0	0
iaa	1	0	1
raa	4	1	0
faa	1	0	0

注) 「i」は initiation, 「r」は response, 「f」は follow-up, 「ia」は initiation+adding, 「ra」は response+adding, 「fa」は follow-up+adding, 「rf」は response+follow-up, 「iaa」は initiation+adding+adding, 「raa」は response+adding+adding, 「faa」は follow-up+adding+adding を示す。

表 8 はターンの組み合わせの結果である。ターンの組み合わせでは、すべての e 教科書において「initiation-response」が一番多く、3分の1以上を占めている。2位も同様に「initiation」がすべての e 教科書において多いが、3位以下になると各 e 教科書で違いがあるのがわかる。「initiation-response-follow-up」はすべての e 教科書において5位までに入っている。

表 8 ターンの組み合わせの分析結果

	ハン他		イ他		ユン他	
1位	i-r	35.6%	i-r	48.1%	i-r	45.3%
2位	i	14.5%	I	23.1%	i	13.1%
3位	ia-r	12.2%	(action)-r	4.9%	i-r-f	8.2%
4位	i-r-f	9.2%	Ia	3.8%	ia-r	6.5%
5位	i-ra	5.3%	i-r-f	3.4%	ia	4.5%

注) 「i-r」は initiation - response, 「i」は initiation, 「ia-r」は initiation+adding - response, 「(action)-r」は(行動のみ) - response, 「i-r-f」は initiation - response - follow-up, 「ia」は initiation +adding, 「i-ra」は initiation - response+adding を示す。

6 考察

6-1 語彙頻度

本研究では韓国の小学3年生の英語のデジタル教科書「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」と日本の小学5年生の「Hi, friends!1」のデジタル教材の語彙を品詞別に比較した。その結果以下のことが明らかになった。

名詞においては、「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」では dad が多く使われているが、mam は1回も使われていない。これは韓国には家父長制が根強く残っているとされているが、そのようなことが影響しているのではないかと推測できる。第二に、「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」では hello と bye の両方が使われるが、「Hi, friends!1」では bye は一回も使われていない。これらのことから「Hi, friends!1」では出会いの挨拶の場面は出てくるが、別れの挨拶の場面はあまり取り上げられていないことがわかる。第三に、「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」では ruler, pen などの文具, dog, pig などの動物, window, TV など日常的なものが多い。一方で、「Hi, friends!1」の特徴語はほとんどが食べ物に関するものであった。これらのことから、「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」は扱われている場面がバラエティに富んでいるが、一方で「Hi, friends!1」は食べ物に関するものに偏っていると推測できる。さらに、代名詞に関しては、両者とも主格に関しては I, you に関する代名詞を多く使っており、さらに、「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」では it も最も多く使われている。

動詞に関しては、「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」においては be, have, thank, put, open など比較的一般的によく使われる動詞が多く使われており、「Hi, friends!1」では like が do や be よりも多く使われている。さらに、do および don が「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」ではほぼ同数の数であることから、疑問文と否定文が同様に使われているが、「Hi, friends!1」においては do の方が多く、don は少ない。ゆえに、「Hi, friends!1」では疑問文を主に使っていることがわかる。

形容詞に関しては、「ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書」では happy, nice, good など肯定的な語彙が多く使われており、その他, cold, rainy, sunny など天候の形容詞が多いことがわかる。一方、「Hi, friends!1」では many が圧倒的に多く、それについて blue, black, yellow, colorful, purple など色を表す形容詞が多いことがわかる。

6-2 内容分析

対話者の国籍においては、すべての e 教科書において不明なものがほとんどなく、文脈の特定化がなされており、詳細に見てみると、それぞれの e 教科書によって対話者設定において偏りがあることがわかる。ハン他では韓国人同士と韓国人対韓国人以外がほぼ同数で対話の中で一番多い組み合わせであり、登場人物同士、韓国人以外同士と続く。なお、韓国人以外対韓国人以外の対話はわずかであった。6 割以上が韓国人が対話者の一人となっていること、また、韓国人以外同士の対話が 1 割に満たないことから、ハン他は、学習者自身が対話に参加しているという当事者意識を喚起するように企画されていると思われる。また、韓国人同士の対話が一番多いことから、韓国人である学習者が互いに練習するのにモデルとしやすいように企画されていると思われる。

イ他では、韓国人対韓国人以外の対話が群を抜いて多く、そのあとに登場人物同士、韓国人同士、韓国人以外同士の対話と続いている。韓国人対韓国人以外が対象となる対話が 4 割をも占めていること、また、韓国人同士の対話が韓国人対韓国人以外の半分であることは、ハン他と同様に学習者自身が対話に参加しているという当事者意識を喚起するということが意図されていることに加え、実際に韓国国内で遭遇する韓国人対韓国人以外という対話者設定に重点を置いて企画されているためであろう。

ユン他では、韓国人対韓国人以外の対話がイ他よりも多く過半数近くを占め、登場人物同士、韓国人以外同士、韓国人同士の対話と続くが韓国人同士の対話に比べるとかなり少ない。これは、イ他同様学習者である韓国人が実際に韓国国内で遭遇する韓国人対韓国人以外という対話者設定に重点を置いているからであり、英語使用の当事者としての意識をより強く喚起するためであると思われる。

対話場所においては、すべての e 教科書において不明なものがほとんどなく、文脈の特定化がなされているといえる。詳細に見ると、おおむねどの e 教科書も animation 以外は、家、戸外、学校に分類されるが、イ他やユン他では、そのいずれもがおおよそ等比率で登場している。これは子どもの身近な場所のどこにおいても学習する英語の communication が成立するということを示唆しようとしているからであろう。その他、ハン他では戸外が対話場所と設定されている場合が家と学校の 2 倍近く多い。これは、家や学校に比べ戸外の方が真正の英語の communication が生まれやすいことを踏まえて、学習者になるべく真正の文脈を提供しようとして企画しているからではないかと思われる。

カレイラ・執行・宮城 (2016) では、現在日本の多くの小学校で使用されている『Hi, friends! 1, 2』では、対話者は日本人同士が半数を占め、場面設定は、不明あるいは無背景であり、同じような設定が多いと報告しており、それらと本研究で分析した韓国の e 教科書を比較してみると、ハン他、イ他、ユン他のいずれにおいても、『Hi, friends! 1, 2』よりも学習者である児童が学習目標である target sentence の機能を理解しやすい教材になっているといえるのではないだろうか。

場面数、対話数、ターン数では、ハン他は場面数とターン数が一番多く、対話数においてはユン他が対話数では一番多い。これらのことから、ハン他が他の 2 つの e 教科書よりも、多くの聞く活動およびそれに準ずる活動部分、つまり多くの input を収録していることがわかる。また、場面数、対話数、ターン数の関係からは、どの e 教科書においても 1 場面に発生する対話数はおおむね 1 対話が多く、その対話は 2 ターン（一人ずつが 1 ターン話してやり取りする）からなることが多い。ハン他とユン他では次に 3 ターンが、イ他では 1 ターンと続き、4 ターン以上はほとんどなく、1 対話内のターン数は一定（1~3 ターン）の傾向にあるといえる。これらの結果をカレイラ他 (2016) の『Hi, friends!1』と比較してみると、『Hi, friends!1』は「各項目に収録されている対話数や、対話をなすターン数も一定ではない」（カレイラ他, 2016, p. 79）ため、学習者である児童にとって対話のやり取りが定型であり、状況から理解しやすく、また、推測しやすい対話となされているのは韓国の e 教科書であることは明らかであるといえよう。

さらに、ターンを構成する要因（ターンの種類）では、すべての e 教科書において「initiation」と「response」でおおよそ 80%を占めており、また、組み合わせも「initiation・response」が一番多いことから、対話は基本的で単純なやり取りが多いことがわかる。これについては『Hi, friends!1』と同じ傾向を持つといえるであろう（カレイラ他, 2016）。これは、韓国と日本いずれも児童にとっての外国語学習では単純なやり取りをモデルとして提示することが適切であると判断しているからであると思われる。また、組み合わせの 3 位以下ではそれぞれの e 教科書において違いがあるが、「initiation-response-follow-up」はどの e 教科書においても 5 位までに入っており、やり取りの基本形として重要であるとみなされていることがわかる。ターン内の組み合わせ数ではハン他が他の 2 つの e 教科書よりもかなり多く、より複雑な構成のターンを多く使用し

ているという特徴がある。

7 おわりに

本研究では韓国の小学3年生の英語のデジタル教科書と日本の小学5年生の「Hi, friends!1」のデジタル教材の語彙とコンテキストを比較した結果、「Hi, friends!1」と比べると韓国のデジタル教科書はどの品詞においても比較的基礎的な語彙をバランスよく提示していることが明らかになった。さらに、韓国のデジタル教科書に収録されている対話はコンテキストが特定化されやすく、「Hi, friends!1」では、特定化されにくいことが明らかになった。これらのことから、日本は2020年度の小学校での英語の教科化にむけて、一定の語彙や表現に偏ることなく、より基礎的な語彙を万遍なく学習できるような英語の教科書のデジタル教材を作成していくべきであり、さらに、多様なコンテキストでターゲットセンテンスを繰り返し練習できるような英語の教科書のデジタル教材を作成していくべきであると示唆できるであろう。

【参考文献】

- カレイラ松崎順子・執行智子 (2013).「韓国の小学3年生の英語の教科書に付随したデジタル教材『ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書』の分析-『Hi, friends!1』との比較-」『CEIC 研究会論文誌』第4号,90-96.
- カレイラ松崎順子・執行智子・宮城まなみ(2016).「韓国と日本の小学生対象の英語の教科書に付随するデジタル教材の比較」『JES Journal (16)』 pp. 68-83.
- 中條清美・西垣知佳子 (2010). 「小学校『英語ノート』の語彙分析」 English Corpus Studies, 17, 115-126. McCarthy, M. (1991). Discourse analysis for language teachers. New York: Cambridge University Press.
- ハンスネ(2010).『ELEMENTARY SCHOOL ENGLISH3 e-教科書』 チョンジェ教育.
- 石川慎一郎 (2005). 「日本人児童用英語基本語彙表開発における頻度と認知度の問題—母語コーパスと対象語コーパスの頻度融合の手法—」『電子情報通信学会 TL2005』43-48
- 伊東治己・高津和幸・長安憲一・廣地美佳・福嶋雅直(1994).「コミュニケーションの観点からの中学校用英語教科書の分析」『奈良教育大学教育研究所紀要』第30号, 57-68.
- Kim, Y. (2013). A study of primary school teachers' awareness of digital textbooks and their acceptance of digital textbooks based on the technology acceptance model『デジタル政策研究』11 巻 2 号, 9-18.
- McCarthy, M. (1991). Discourse analysis for language teachers. New York: Cambridge University Press.
- Park, H. (2008). A survey of primary English digital textbooks. Modern English Education, 9(3), 123-151
- 山森直人・藤田隆子・武知一誠・秦慶樹・伊東治己(2003).「中学校英語教科書に見られる実践的コミュニケーション能力」『なると教育大学研究紀要(教育科学編)』第18巻, 159-165.
- 山西博之(2011). 「教育・研究のための自由記述アンケートデータ分析入門—SPSS Text Analytics for Surveysを用いて、より良い外国語教育研究のための方法」『外国語教育メディア学会(LET)関西支部, メソドロシー研究部会 2010 年報告論集』 110-124

〈発表資料〉

題名	掲載誌・学会名等	発表年月
Evaluation of Smart Learning in Sejong Special Autonomous City	the International Journal of Arts and Sciences' conference	31 May to 3 June 2016
Present Situation of English Digital Textbooks in Elementary School	2017 Hawaii International Conference on Arts & Humanities	8 January to 11 January 2016